

『惚れこんぢやつたんだよ。』とそこへ入つて来たイヴン・マトゼーギツチが言つた。『そりや間違ひないんだ。』

『え、惚れこんでしまひましたよ。それがどうしました？ だつて、いい人のことを何だつて悪く言ふんです？ あの人は韃靼人だけれど、立派な人間ですわ。』

『本當です、マリヤ・ドミートリエヴナ。』とブットレルが言つた。『あの男の肩を持つておやりになつたのは、全くえらいもんですな。』

一一一

チエチエニヤ線上に於ける前哨堡壘内の生活は、依然として變はりなく流れてゐた。その後二度まで敵軍襲來の警報が傳へられて、中隊が出動したり、民兵が駆け出したりしたけれど、二度とも山匪を抑留することが出来なかつた。彼等は無事に引き揚げて了つた。しかも一度などはズドギーゼンスクで、水を呑ませに連れて行つたコサツクの馬を八頭掠奪して、コサツク兵を一人殺して行つた。部落が荒廢に歸せられて以來、敵の侵襲はまるでなかつた。たゞ左翼長官として、バリヤーチンスキイ公爵が新しく任命された結果、大チエチエニヤへ向かつて、大規模の遠征が行はれるものと期待されてゐた。

バリヤーチンスキイ公爵は總督の親友で、かつてカバルチャ聯隊の隊長をつとめてゐたが、今度全左翼軍の長官として、グロズナヤへ來著するや否や、チエルヌイシヨーフがチロンツォーフに書面で知らせてやつた、皇帝の計畫を實行するために、一個支隊を召集した。ズドギーゼンスクに召集された支隊は、クリーン方面の陣地をさして出發した。軍隊はこの陣地に駐屯して、森の伐採などをしてゐた。チロンツォーフ若公爵は立派な羅紗の天幕に暮らしてゐた。妻のマリヤ・ヴシーリエヴナが陣地にやつて來て、よくそこで泊まつて行つた。マリヤ・ヴシーリエヴナとバリヤーチンスキイの關係は、もう誰にとつても祕密ではなかつた。従つて、宮中づとめなどをしたことのない將校や兵士らは、彼女が野營へ來るお蔭で、夜間の祕密偵察に出されるのを嫌つて、口汚く彼女を罵るのであつた。よく山匪は大砲を引つ張つて來て、陣中へ砲弾を放つた。この砲弾は概ね命中しなかつたので、いつもこの砲撃に對して、別に方法を講じようとしなかつた。けれど、マリヤ・ヴシーリエヴナがゐる時には、山匪が大砲を引つ張つて來て、彼女を驚かしたりする事のないやうに、祕密偵察が方々へ派遣されるのであつた。一人の貴婦人を驚かさないために、夜間の祕密偵察に出あるくといふ事は、忌まじしい癢に障はる話であつた。で、兵士らをはじめとして、上流の社交界に容れられない將校たちは、蔭でマリヤ・ヴシーリエヴナに悪口、雜言を浴びせるのであつた。

ブットレルも、この支隊に集まつてゐる幼年學校時代の同窓や、長官付きの副官や傳令として勤務してゐるクーリン聯隊の同僚に逢ふために、堡壘から休暇を貰つてやつて來た。こゝへ來てから暫くの間は、彼も大いに愉快であつた。彼はポルトラーツキイの天幕に落ち著いて、そこに心から自分を歓迎してくれる多くの知人を見出した。彼はブロンツォーフのところへも行つた。彼は一時この人と同じ聯隊に勤めてゐたので、多少知り合つてゐたのである。ブロンツォーフは頗る愛想よく彼を迎へて、バリヤーチンスキイ公爵に紹介した上、送別の宴會に彼を招待した。それはバリヤーチンスキイ公爵の就任前に、左翼長官をしてゐたコズロフスキイ公爵のために、催されるものであつた。

宴會は素晴らしかつた。澤山の天幕が方々から寄せ集められて、いく列にも並べられた。そして、天幕の長さだけに食卓が配置され、その上には食器や酒の瓶が一面に並べられた。何もかも、ペテルブルグの近衛隊の生活を聯想させるものばかりであつた。午後二時に、一同は食卓に向かつた。眞中にはコズロフスキイとバリヤーチンスキイが、兩側から向かひ合つて坐つた。コズロフスキイの左右にはブロンツォーフ夫妻が席を占めた。食卓の兩側にはカバルチャ聯隊とクーリン聯隊の將校たちが、すらりと綺羅星のやうに居流れた。ブットレルはポルトラーツキイと並んで坐つた。二人とも陽氣さうに喋りながら、近所の將校連と盃を交はしてゐた。いよいよ焼き肉が出る

段になると、從卒らは、銘々の盃にシヤムパンを注ぎはじめた。ポルトラーツキイは心の底から心配さうな、同情に堪へないやうな調子でブットレルに言つた。

『わが「いかに」(コズロフスキイ) 將軍はいい恥ぢを搔くぜ。』

『どうして?』

『だつて演説をやらなくちやならんのだぜ。あの先生にそんなことが出来るかい?』

『さうだよ、君、こいつは彈丸雨注の下で、堡壘を占領するやうな具合には行かんからな。おまけに隣りには貴婦人がゐるし、宮中摺れのした貴族連も控へてゐるんだからな。まつたく目が當てられないくらゐだよ。』こんなことを將校達は互に話しあつた。

けれど、いよいよ莊重な瞬間がやつて來た。バリヤーチンスキイは立ち上がつて、盃を擧げながら、コズロフスキイの方へ向いて、簡単な挨拶を試みた。バリヤーチンスキイが挨拶を終つた時、コズロフスキイは立ち上がつて、かなりしつかりした聲で演説をはじめた。

『今回、陛下の勅慮に従ひまして、いかに本職が諸君の許を去ることに——諸君とお別れする事になりましたが、』と彼は言つた。『しかし本職は常に諸君と共にあるものと考へて戴きたい……「戦場の兵士は一人に非ず」といふ言葉が、いかに眞理であるかは、諸君の熟知してゐられるところであります。従つて、いかに本職が勤務上多くの褒賞を受けたにしても、また陛下の洪恩に依つて、い

かに多くの仁慈に浴したとしても、いかに高き地位、いかに花々しい名聲、いかに多くのその他のものを享受したとしても、いかに……」そこで彼の聲は震へはじめた。「いかにこれらすべてのものが、ただたゞ諸君にのみ負ふところのものであるか、深く肝に銘じて已まないのではありません！」彼の皺深い顔は一そう皺だらけになつた。彼はすゝり上げて泣き出した。涙がその目がしらに浮かんだ。「いかに本職は心の底から、偽りなき熱烈な感謝の念を、諸君に捧げたいと思ひます……」

コズローフスキイはそれ以上言葉が出なかつた。彼は起ち上がつて、將校たちを抱擁しはじめた。公爵夫人は手巾で顔を隠した。セミヨン・ミハイロヰツチ公爵は口をゆがめながら、目をしばたいた。多くの將校たちもやはり涙ぐんで來た。餘りよくコズローフスキイを知らなかつたブツレルも、同様に涙を抑へることが出来なかつた。この場の光景がすっかり氣に入つたのである。それからバリーチンスキイ、ズロンツォーフをはじめとして、その他の將卒の健康のために、祝盃が擧げられた。そして客人達は飲み乾した酒と、いつもの感じ易い軍人式熱情に酔はされて、宴會の席から出て行つた。

その日は申し分のない、静かでうららかな日和で、空氣は爽やかに爽々しかつた。到るところに焚き火のばち／＼燃える音がして、歌の聲が聞こえてゐた。まるですべての人が、何かを祝つてゐるやうであつた。ブツレルはこの上なく幸福な、感激に満ちた氣持ちで、ポルトラーツキイのと

ころへ行つた。ポルトラーツキイの家には將校達が集まつて、歌留多卓を擧げた。そして副官が百ルーブリはつて、銀行をはじめた。ブツレルは、すぼんのかくしの中に財布を握つたまゝ、二度ばかり天幕の外へ出たが、たうとう我慢し切れなくて、決して勝負はしないと、自分にも兄弟にも誓つたにも拘らず、札に金を賭けはじめた。

それから一時間も経たないうちに、ブツレルは眞赤な顔をして汗みどろになり、體ぢう白墨で眞白に汚れたまゝ、卓子の上に兩肘を突きながら、角のくしゃくしゃになつた歌留多の裏に、自分の賭け高を數字に書いてゐた。もう彼はしこたま負けてしまつたので、そこに記入されてゐる自分の負債を勘定するのが、恐ろしいくらゐであつた。もつとも、彼は勘定しないでも分かつてゐた。俸給は全部前借しても、馬を賣り飛ばしても、この見知らぬ副官が記入した負債の金額を、拂ひ切ることは出来なかつたのである。彼はまだまだ勝負を續けるところであつたが、副官はむづかしい顔つきをしながら、眞つ白な綺麗な手に持つてゐた歌留多を下に置き、白墨で書いたブツレルの負け高を勘定しはじめた。ブツレルはさも極まりわるさうに、今すぐ負けた金を全部拂ふことは出来ないから、あとで家から届ける、と言ひ譯をはじめた。彼がかう言つた時、一同は氣の毒さうな顔をした。ポルトラーツキイでさへ、彼の視線を避けようとしてゐるのに氣が附いた。それは彼にとつて最後の晩であつた。こんな勝負などはじめないで、招待を受けてゐるズロンツォーフの所

へ行きさへすれば、何もかも無事だったらうに、と彼は思った。けれど今は無事でないどころか、恐ろしい羽目になつてしまつたのである。

同僚や知人に別れを告げて、彼は家へ歸つた。歸るとすぐ横になつて、普通歌留多に負けた人々の例として、十八時間ぶつづけに睡つた。マリヤ・ドミートリエヴナは、彼が「見送りのコサックに心附けてやるのだから」と言つて、五十カペイカ無心したことだの、彼の沈んだ顔つきだの、ぶつきら棒な返辭などから推して、歌留多に負けたのだなと察した。彼女は、なぜブツトレルに休暇などやつたのかと、イヴン・マトゼーギツチに食つてかかつた。

翌日、ブツトレルは十一時過ぎに目を醒ました。彼は自分の立場を思ひ出すが早いか、再び今までの忘却の淵へ潜り込まうとしたけれど、もうそれは出来なかつた。あの見知らぬ副官に借りてゐる四百七十ルーブリを返すために、何とか方法を講じなければならなかつた。その一つとしては、兄に手紙を書いて、自分の不始末に對する悔悟の意を示し、兄弟の共有となつてゐる水車場の勘定から、五百ルーブリだけ最後の送金をするやうに、頼むことであつた。それから、彼は吝嗇な親戚の婦人に手紙を書いて、利子は幾らでも望み通り出すから、五百ルーブリ送つてくれと無心してやつた。そのあとで、彼はイヴン・マトゼーギツチのところへ行つて、少佐自身、といふより、寧ろマリヤ・ドミートリエヴナの手許に、金があるだらうと見込みをつけて、五百ルーブリ融通してく

れと頼んだ。

『おれはすぐにも貸してやるんだが、』とイヴン・マトゼーギツチが言つた。『しかしマーシャが出しやすまいよ。どうもあの、女といふ奴は、しやうのない握り屋だからな、厭になつちまふ。しかし何とかして、この急場を遁れなくちやならんな、困つたな……あの酒保の畜生が持つとらんかな?』

けれど、酒保に借りるなどといふことは、考へるまでもなかつた。かういふわけで、ブツトレルの救ひはたゞ兄か、それとも吝嗇な親戚の婦人から來るよりほか、もう當てがないこととなつた。

### 三三

チェチュニヤで自分の目的を果たさなかつたので、ハヂ・ムラートはチフリスへ引き返した。そして毎日のやうに、ブロンツォーフの所へ訪ねて行つて、面會を許される度に、どうか山匪の捕虜を集めて、それを自分の家族と交換するやうに依頼した。さうして貰はないらちは、自分の手足が縛られてゐるも同然で、思ふやうに露西亞軍に仕へて、シャミールを滅ぼすことが出来ない、と言つた。ブロンツォーフは出来るだけの事をする、漠然とした約束をするだけで、アルグチンスキイ將軍がチフリスへやつて來たら、この人とよく相談した上、はつきり事態を決するからと、一日延

ばしにしてゐた。その時ハチ・ムラートは、ヌーフといふ高架索の小さな町へ行つて、そこで暫く暮らさせてくれと、デロンツォーフに許可を乞ひはじめた。そこにゐた方が、シャミールをはじめその臣下の人々と、自分の家族に關する交渉をするのに、便宜が多いと考へたのである。そればかりでなく、このヌーフといふ回々教の町には、この教への寺があつたので、回々教の掟が要求する祈禱を行ふのにも、はるかに便利がよいのであつた。デロンツォーフはこのことを書面で、ペテルブルグへ相談してやつたが、それにも拘らず、とにかくハチ・ムラートに、ヌーフ行きを許可したのである。デロンツォーフやペテルブルグの當局、それからまた一般に、ハチ・ムラートの事件を知つてゐる露西亞人全部の目から見ると、この事件は高架索戦争に於ける喜ぶべき轉機として、或は單に興味ある一偶發事件として映つたばかりであるが、ハチ・ムラートにとつては、恐るべき全生涯の轉回であつた（殊に最近に至つてその感が深かつた）。彼は一面に於て自己を救ふために、また一面に於ては、シャミールに對する憎惡のために、山地から逃げ出したのである、この鬭争はかなり困難なものであつたけれど、とにかく彼は目的を達したので、始めの間はこの成功が彼を喜ばした。彼は眞劍にシャミール攻撃の作戦を考量した。けれど、容易に實行出来ると思つてゐた家族の脱出が、豫想以上に困難なのが分かつた。シャミールは彼の家族を捉へて捕虜とし、女達を各部落へ引き渡し、息子を首にするか殺してしまふと威嚇した。で、今度ハチ・ムラートはヌーフへ行つて、

ダゲスタンにゐる自分の味方を通じて、カづくか計略によつて、家族をシャミールの手から奪回しようとしてた。ヌーフで彼の所へ來た最後の斥候は、次ぎのやうな情報を齎らした。彼に心服してゐるアヴール人は彼の家族を奪つて、一緒に露西亞軍の中へ投じようと謀らんでゐるが、それを企ててゐる人々が餘り小人數なので、家族の監禁されてゐるエヂェノでは、それを實現することがむづかしい。従つて家族がエヂェノから、他の土地へ移されるやうなことがあつたら、そのとき道に擁して奪ひ取らうといふのである。ハチ・ムラートは家族を救ひ出した者には、三千ルーブリの褒美をやると、味方の人々に觸れ出させた。

ヌーフでは五間からなるさゝやかな家が、ハチ・ムラートの住まひに當てられた。それは回教寺院と汗の宮殿から、程遠からぬところであつた。彼に附けられた將校達も、通辯も、護衛者も、みな同じ家に住まつてゐた。ハチ・ムラートの生活は、山地から來る斥候の期待とその應接、それから當局の許可を得てゐる郊外の遠乗り、などによつて過ごされた。四月八日、遠乗りから歸つて來たハチ・ムラートは、留守にデロンツォーフの部下がチフリスから來た、と知らされた。この官吏が齎らした報知を聞きたい氣持ちは、山々であつたけれど、ハチ・ムラートは警部と官吏が待つてゐる部屋へ行く前に、まつ自分の部屋へ入つて、正午の祈禱にかかつた。祈禱を済ますと、彼は客間と應接室になつてゐる、次ぎの部屋へ出て行つた。チフリスからやつて來た官吏は、四等官のキリー

ロフといふ男であつたが、ハヂ・ムラートに向かつて、十二日までアルグチンスキイとの會見のために、チフリスへ来て貰ひたいといふ、ヂロンツォーフの希望を傳へた。

『ヤクシー(よろしい)』とハヂ・ムラートは腹立たしげに言つた。

官吏のキリーロフが彼の氣に入らなかつたのである。

『ところで、金は持つて來たか？』

『持つて來ました。』とキリーロフは言つた。

『今日から二週間分だ。』とハヂ・ムラートは言つて、十本の指を並べて見せ、それから更に四本を出して見せた。『さあ、よこしなせう。』

『すぐ出してあげます。』旅行鞆の中から金入れを出しながら、官吏はかう言つた。『一たい何に金が要るんだらう？』ハヂ・ムラートに分かるまいと思つて、彼は露西亞語で呟いたが、ハヂ・ムラートはちやんと分かつてゐたので、腹立たしげにキリーロフを睨んだ。キリーロフは金を取り出しながら、チフリスへ歸つてから公爵に報告の材料を作るために、ハヂ・ムラートと言葉が交じへたくなつた。彼は通辯を介して、ことは退屈ではないか、と尋ねた。ハヂ・ムラートは、文官服を著た小柄な肥つた男を、蔑すむやうにちらつと横目で見たまゝ、何んとも返辭をしなかつた。通辯は問ひを繰り返した。

『わたしはこの男と話しをしたくないんだから、さう言つてくれ、はやく金を出してもらひたい。』かう言ひ終ると、ハヂ・ムラートはまた卓子の前に腰をおろして、金の勘定をする身構へをした。

キリーロフは金貨を取り出して、十枚づつ棒にした包みを七本並べて（ハヂ・ムラートは、日に銀貨五枚づつ支給されてゐた）、それをハヂ・ムラートの方へ押しやつた。ハヂ・ムラートはチェルケス外套の袖に金貨を抛り込むと、やをら身を起して、急に思ひがけなく、四等官の禿げ頭を軽くびしやりと叩いたまゝ、ふいと部屋を出て行かうとした。四等官は躍り上がつて、あの男はこんなことをする権利など持つてゐない、自分は太佐相當官なのだから、と通辯に申し入れさせた。警部もそれに相槌を打つた。けれどハヂ・ムラートは、萬事承知してゐる、といふ風に一つ頷いて、部屋から出てしまつた。

『どうもああいふ人間は仕方がない。』と警部は言つた。『結局、短刀でぶすりとやるくらゐが落ちですよ。ああいふ手合ひを相手に話しなんか出來ませんよ。どうもだん／＼氣が變になつてくるらしいですね。』

日がとつぷり暮れるや否や、頭巾で目の邊まで顔をかくした二人の斥候が、山からやつて來た。警部はそれをハヂ・ムラートの部屋へ連れて來た。斥候の一人は色の黒い肉附きのいいタウリヤ人で、今一人は瘦せた老人であつた。この二人が齎らした情報は、ハヂ・ムラートにとつて、喜ば

しいものではなかつた。彼の家族を救ひ出さうとした友人たちも、今ではすつかり手を引いて了つた。それはハヂ・ムラートに力を藉すものを、思ひ切つて極刑に處するといふ、シャミールの威嚇を恐れるからであつた。

斥候の物語を聞き終ると、ハヂ・ムラートは組み合はせた足の上に、兩の肘を突いて、毛皮帽子を被つた頭を垂れ、長いあひだ沈黙を守つてゐた。ハヂ・ムラートは思案してゐた。決定的に思案してゐた。彼は今これが最後の思案で、何らかの決心が必要だといふことを、自分でも承知してゐた。ハヂ・ムラートは頭を上げた。そして金貨を二枚取り出して、それを一枚づつ斥候に渡したのち、かう言つた。

『行け。』

『返事は何と申しませう？』

『返事は神の御心のまゝだ。行け。』

斥候は起ち上がつて、出て行つた。ハヂ・ムラートは膝の上に兩肘を突いたまゝ、毛氈の上に坐りつゞけてゐた。彼は長い間かうして坐つたまゝ、じつと考へてゐた。

「どうしたものだらう？ シャミールを信じて、彼のところへ歸つたものだらうか？」とハヂ・ムラートは考へた。「あいつは狐のやうな奴だから、おれを瞞すに違ひない。たとへ瞞さないにして

も、あの赤毛の古狐に屈服することは不可能だ。なぜといつて、一旦おれが露西亞軍に投じた今となつては、もうおれを信用しないに決まつてゐるからだ。』とハヂ・ムラートは考へた。

彼はタウリヤの或る昔話を思ひ出した。一羽の鷹が獵師につかまつて、しばらく人間のあひだに暮らしてゐたが、やがて山の仲間の所へ歸つて來た、彼は歸つては來たけれど、脚には紐が縛りつけられたまゝで、紐には鈴が残つてゐた。仲間の鷹は彼を受けつけなかつた。『飛んで行け。』と彼等は言つた。『その銀の鈴を附けて貰つたところへ歸るがいい。おれたちの仲間には鈴もなければ、紐もないのだから。』けれど鷹は故郷を見捨てなくなかつたので、そのまゝそこに踏み止まつた。しかし、ほかの鷹が彼を仲間に入れないで、到頭つゞき殺してしまつた。

「おれもそれと同じやうに、つゞき殺されるだらう。」とハヂ・ムラートは考へた。

「ではこゝに残らうか？ 露西亞皇帝のために高架索を征服して、名譽と官位と富みを擱むことにしようか？」

「それは出来ることだ。」チロンツォーフとの會見や、その愛想のいい言葉を思ひ出しながら、彼はかう考へた。

「しかし、すぐに決心しなけりやならない。でなければ、あいつが家族をみな殺しにして了ふ。」ハヂ・ムラートは夜つびて睡らずに、考へ明かした。

ちやうど眞夜中頃、いよ／＼彼の決心がついた。彼は山の中へ逃げ込んで、自分に心服してゐるアブリヤ人と一緒に、エヂェノへ闖入し、その場に討ち死にするか、家族を救ひ出すか、運を天に任さうと決心した。しかし、家族を連れて露西亞軍に投ずるか、それともフンザフへ遁れて、そこでシャミールと戦ふか——その點はハチ・ムラートも決心がつかかなかつた。たゞさし當り露西亞軍を去つて、山中へ遁れねばならぬ、といふことだけ分つてゐた。で、彼は早速この決心の實行にかつた。彼は枕の下から綿入れの下ベシユメイト 著を取り出して、從者たちの寢てゐる部屋へ行つた。彼等は玄關を隔てて向かう側にゐた。彼が戸を開け放した玄關に出るが早いか、露を含んだ月夜の空氣が彼の體を裏み、家に接した庭で鳴いてゐる、鶯の甲高い聲が耳朶を打つた。

ハチ・ムラートは玄關を通り抜けて、從者たちの寢てゐる部屋の戸を明けた。部屋の中には明かりがなくて、たゞ窓から細い新月が、微に射し込んでゐるばかりであつた。卓子と二脚の椅子が脇の方に片寄せられて、四人の從者は四人とも、毛氈や外套の上にごろ寝してゐた。ハネーフィは馬と一緒に庭で寢てゐた。ガムザーロは戸のきしみを聞きつけると、起き上がつて、ハチ・ムラートの方を見た。そして主人の顔を見分けると、再び横になつた。その傍に寢てゐたエルダールは、い

きなり跳び起きて、下ベシユメイト 著を著ながら、命令を待つてゐた。クルバント・ハン・マゴーマは睡つてゐた。ハチ・ムラートは下ベシユメイト 著を卓子の上に置いた。すると下著は、何かが卓子の板にぶつつかると堅い音を立てた。それは中に縫ひ込んである金貨であつた。

『これも縫ひ込んで置け。』けふ受け取つた金貨をエルダールに渡しながら、ハチ・ムラートはかう言つた。エルダールは金貨を受け取ると、すぐに明かるい場所へ行つて、短劍の小柄コブツを取り出し、下著の裏を解きはじめた。ガムザーロは身を起こして、胡座を組みながら坐つた。

『ガムザーロ、お前は若い者どもに、銃やピストルを調べて、彈藥の用意をして置くやうに言ひつける。明日は遠方へ出かけるのだから。』とハチ・ムラートは言つた。

『彈丸たまもあります。火藥もあります。準備はすぐに出來ます。』とガムザーロは言つて、何か譯の分からぬことを唸つた。ガムザーロは、なぜハチ・ムラートが銃の裝填を命じたのか、そのわけを悟つた。彼はそも／＼の始めから、たゞ一つのことしか望んでゐなかつた。しかもその希望は、時が經つに従つて、次第に募つて行くのであつた。ほかでもない、出来るだけたくさん露西亞の犬を斬り殺して、山の中へ逃げ歸ることであつた。今ハチ・ムラートも、それと同じことを望んでゐるのを見て、彼はわが得を意たり、といふやうな顔をしてゐた。



ハヂ・ムラートが出て行つた時、ガムザートは仲間を叩き起こした。そして四人がかりで夜つびて銃や、ピストルや、引き金や、燧石などを改めたり、薬池へ新しい火薬を入れたり、火薬を填めて油紙に包んだ弾丸を、胸の薬筒入へ挿し込んだり、刀や短剣を磨いたり、刀身に油を塗つたりした。夜明け前にハヂ・ムラートは、齋戒沐浴に使ふ水を汲みに、再び玄關へ出て行つた。玄關ではゆるべよりもつと朗らかな澄んだ聲で、しのゝめに歌ひ競ふ鶯の囀りが聞こえた。従者たちの部屋では、短剣を石に當てて研ぐ、規則正しい鋼の音がしゅつ／＼と聞こえた。ハヂ・ムラートは桶から水を汲み取つて、自分の戸口に近づいた時、従者たちの部屋から刃物を研ぐ音のほかに、ハヂ・ムラートの耳に聞き馴れた歌を歌ふ、ハネーフィの細い聲が聞こえた。ハヂ・ムラートは立ち停まつて、耳を傾けた。歌の大意はかういふのであつた。勇士ガムザートが部下の若者たちと一緒に、白馬の一群を露西亞側から掠奪して、山の方へ追つてゐたところ、テレク河の彼方で露西亞の公爵が彼等を追ひつめ、大軍をもつて林のやうにガムザートを取巻いた。そのときガムザートは馬を悉く斬り殺し、その死骸を高く積み上げた血みどろの堡壘の影に、部下の勇士たちと共に立て籠もり、小銃に弾丸の残つてゐる限り、腰に短刀の吊られてゐる限り、血管に血の流れてゐる限り、露西亞人と戦ひつゞけた。けれど、いよ／＼討ち死にする前に、ガムザートは空に一群の鳥を見つけて、かう呼びかけた。『あゝ渡り鳥、お前たちはわれらの家へ飛んで行つて、われらの姉妹や、母や、

色白き乙女らに、われら一同が異端との戦ひに討ち死にしたと告げてくれ。われらの骸は墓の中に安らげく横たはるのではなくて、貪婪な狼の群れに肉を割き骨を嚙まれ、黒い鳥に目を剝り出されるのだと言つてくれ。』

これらの言葉で歌は終はつてゐた。沈んだ節廻はしで歌はれたこの最後の二節に、快活なハン・マゴーマの勇まじげな聲が加はつた。彼は歌の最後に大きな聲で、『リヤ、イリヤーフ、イリ、アラ！』と叫びながら、絹を裂くやうな鋭い調子で意味のない叫びを立てた。やがて、あたりはしんと静まつた。再び庭から響いて来る鶯の囀りと、刀の砥石に觸れ合ふ規則たゞしい響きが、戸の蔭から洩れて聞こえるばかりであつた。

ハヂ・ムラートはすつかり考へこんで了つたので、水がこぼれるほど水差しを傾けたのに、氣がつかないほどであつた。彼は自分で自分を嘲けるやうに首を振つて、居間へ入つて行つた。朝の淨めを済ませた後、ハヂ・ムラートは武器を改めて、寢床の上に坐つた。もう何もすることはなかつた。馬に乗つて出かけるためには、付き添ひの許しを受けなければならなかつた。けれど外はまだ暖かつたので、付き添ひは睡つてゐた。

ハネーフィの歌は、もう一つの歌を想ひ起こさせた。それは彼の母親の作で、本當にあつた出来事を歌つたものである。その出来事といふのは、ハヂ・ムラートが生まれてから、間もなく起こつ

た事である。彼は母から始終それを話して聞かされてゐた。

歌は次ぎのやうなものである。

『おん身の刃はわが白き肌を裂きぬ。されども我はいとし子をその傷口に押し當てて、己れが熱き血潮もて吾子の身をしと濡らしぬ。やがて痛手は草根の力も藉らず癒え果てて、吾子は生ひ立ち勇士となりぬ。』

この歌詞は、ハチ・ムラートの父に向けられてゐるのであつた。歌の意味はほかでもない。ハチ・ムラートが生まれた時、汗の妻もウンマ・ハンといふ男の子を生んで、ハチ・ムラートの母を乳母に召し寄せた。ハチ・ムラートの母は、汗の長子アブヌツァール・ハンをも育て上げたのである。けれどパチマートは、わが子を手離したくなかつたので、行くのはいやだと言つた。ハチ・ムラートの父は立腹して、せひ行くやうに命じた。パチマートが再びそれを拒んだ時、夫は彼女を短刀で突いた。もし傍の者が彼女を連れて逃げなかつたら、彼女は殺されたに違ひないのである。かうして、パチマートはわが子を手離さずに育て上げた——つまりこのことを歌つた歌なのである。ハチ・ムラートは母のことを想ひ起こした。彼女は小家の屋根の上で、毛皮外套を被りながら、わが子を抱いて寝せつけようとしながら、この歌を歌つたものである。彼はよく、傷あとの残つてゐる脇腹を見せてくれと頼んだ。彼は母の生き生きした姿を、さながら目のあたり見るやうな氣持

ちがした——それはこんど山に置いて來た皺だらけな、白髪頭の、齒と齒の間に隙きまのある老婆ではなくて、若くて美しい、しかも力の強い、女盛りの母であつた。そのころ彼はもう五つになつて、かなり重かつたけれど、彼女はわが子を籠に入れて、脊中に縛りつけ、山越えして祖母のところへ行つたものである。

それからまた彼は白い髻を生やした、皺の深い祖父をも思ひ出した。彼は筋ばつた手で銀を打ちながら、よく孫に祈禱を唱へさせた。山の下には泉が噴いてゐて、彼は母の白い股引につかまりながら、一緒にそこへ水汲みに行つた。それから、よく彼の顔を嘗めた瘦せ犬も、記憶に浮かんだ。取り分け母と一緒に納屋へ行つた時、そこに立ち單めてゐる煙と、酸乳の匂ひがまさ／＼と思ひ出された。母はそこで牛の乳を搾つて、それを沸かしてゐたのである。また始めて頭を剃りおとされた時のことを思ひ浮かべた。壁に懸かつてゐるびか／＼光る眞鍮の盆に、青々とした自分の頭が丸く映つてゐるのを見て、彼はびつくりしてしまつた。

自分の子供時代を思ひ出すと、彼は自分の愛子ユスーフのことを聯想した。この子の頭を始めて剃り落としたのは、彼自身であつたが、今ではこのユスーフが若い、美しい勇者となつてゐる。彼は最後に逢つた時のわが子の面影を心に描いた。それは彼がツェルメスを出發する當日の事だつた。息子は彼の馬を牽いて來て、見送りの許しを乞うた。彼はちやんと著替へをして、武装をと

のへ、自分の馬の手綱をとつてゐた。ユスーフの薔薇色をした若々しい美しい顔も、細つそりとした脊の高い姿全體も（彼は父よりも脊が高かつた）、勇氣と青春と生の喜びに息づいてゐた。歳が若いにも似ず幅の廣い肩、青年らしいしつかりした腰骨、すらりと長い足、長く逞しい手、一舉一動に現はれる力と強靱性と身軽さは、いつも父を喜ばせてゐた。彼はいつもわが子に見惚れてゐたのである。

『お前は残つてゐた方がいい。いま家にはお前よりほかに誰もゐないのだから、お母さんやお祖母さんを護つてくれ。』とハヂ・ムラートは言つた。

ユスーフは自分の生きてゐる限り、母や祖母に誰も指一本さすことは出来ない、満足の餘り顔を赧めながら言つた。その時の若々しい誇らしげな表情を、ハヂ・ムラートは今でも憶えてゐた。それでもユスーフはやはり鞍に跨がつて、小川まで父を見送つた。そこから彼は引き返したが、それ以來ハヂ・ムラートは妻も、母も、息子も見ないのである。

あゝ、この息子をシャミールは盲やしろにしようとしてゐるのだ！ 妻の受けるべき侮辱、それはもう考へて見ることさへ堪らなかつた。

かうしたものの思ひが、すつかりハヂ・ムラートを興奮させて了つたので、彼はもうちつと坐つてゐられなかつた。彼はいきなり立ち上がつて、跛をひきながら入り口に近より、戸を明けてエルダ

ールを呼んだ。太陽はまだ昇らなかつたけれど、あたりはもうすつかり明かるくなつてゐた。驚はまだ歌ひやめないでゐた。

『付き添ひのところへ行つて、散歩に行きたいからと、さう言つてくれ。そして馬に鞍を置くんだ。』と彼は言つた。

## 二四

最近ブットレルにとつて、唯一の慰藉となつてゐたものは、武人的趣味であつた。彼は軍隊勤務の時ばかりでなく、私生活でさへもそれに没頭してゐた。彼はチェルケス外套を着て、高架索風の曲乗りをしたり、二度もボグダーヌイチと一緒に伏兵に行つたりした。もつとも、二度ながら誰ひとり殺すことも、見付け出すことも出来なかつたけれど、この有名な勇士ボグダーヌイチに接近し、友誼的關係を保つといふことが、ブットレルには何となく愉快な、しかも重大な事のやうに思はれた。例の借金の方は、或る猶太人から恐ろしい高利で金を借りて、すつかり拂つてしまつた。つまり、それは本當に解決されない難關を、一時延期したといふに過ぎないのであつた。彼は自分の立場を考へないやうに努め、武人的趣味以外に、なほ酒で現實を忘れようとしてゐた。彼はだんだん酒量が強くなつて、一日一日と道德的に弱くなつて行つた。いま彼はもうマリヤ・ドミートリ

エヴナに對して、美しきヨセフではなく、むしろ無作法に彼女の後を追ひ廻はすやうになつた。けれど驚いたことには、彼女から斷乎たる手強い拒絶を食らつて、すつかり赤恥ぢを搔いてしまつた。

四月の終り頃、一つの支隊が要塞へ到着した。それは從來不可能と見做されてゐた、チェチュニヤ横斷を遂行するために、新しくバリヤーチンスキイが派遣したものである。その中にはカバルヂヤ聯隊の二箇中隊があつた。この中隊は、當時高架索で行はれてゐた習慣に従つて、ターリン聯隊に屬する中隊から、賓客としての待遇を受けた。兵士らは各兵營に集まつて、夜食や、粥や、牛肉などを馳走になつたばかりでなく、ヲートカまでも振る舞はれた。また將校たちは、將校の宿舎にそれ／＼配置された。そして一般の習はしに従つて、この土地の將校は、新たに到着した將校をもてなしたのである。

饗應は唱歌隊附きの酒盛りで終つた。イヴン・マトエーギツチはすつかり酔つぱらつて、もう赤いのを通り越して、蒼ざめた灰色の顔をしながら、椅子の上に馬乗りになつたまゝ劍を引き抜いて、想像の敵を斬り拂ひながら、罵つたり、聲高に笑つたり、みんなと抱き合つたり、『シャミールが謀叛を起こしたが、それから幾年たつたやら、トライ・ライ・ラ・タ・タイ、それから幾年たつたやら。』といふ自分の好きな歌に合はせて、踊りを踊つたりした。ブットレルもその席に居合はせた。彼はかういふものの中に、武人的詩趣を見出さうと努めたが、心の奥底では、イヴン・マト

エーギツチが氣の毒だつた。がそれかといつて、彼を止めるのは到底不可能な事だつたので、ブットレルは頭に重苦しい酒の酔ひを感じながら、そつと部屋を出て歸途に就いた。

満月が白い小家の列や、路上の石を照らしてゐた。あたりは一面に明かるくて、路に轉がつてゐる石ころでも、藁しべでも、牛馬の糞でも、一々見分けられるほどであつた。ブットレルは家の傍まで來ると、布で頭から頸筋を包んだ、マリヤ・ドミートリエヴナに出會つた。彼女に小つびどく刎ねつけられてから以來、彼は少し極まりが悪くなつたので、なるべく彼女と顔を合はさないやうにしてゐた。けれど今は月夜で、しかも一杯飲んだ後なので、ブットレルはこの出會ひが嬉しかつた。そして、また彼女に甘えたいやうな氣持ちがした。

『あなたどこへ?』と彼は尋ねた。

『いゝえね、家のお爺さんの様子を見に行かうと思つて。』と彼女はさも隔てなさうに答へた。彼女は眞劍にきつぱりとブットレルの戀を斥けたけれど、最近かれがいつも自分を避けてゐるのが、何となく面白からず感ぜられた。

『なあに、様子なんか見ることには要りませんよ、今に歸つて來ます。』

『歸つて來るでせうか?』

『歩いて來なければ、擔がれて來ますよ。』

『それなんですよ、それがわたしいやなの。ちや、行かない方がいいでせうか?』とマリヤ・ドミトリエヴナは言った。

『さうですとも、行くのをおよしなさい。それより、家へ歸らうぢやありませんか。』

マリヤ・ドミトリエヴナは踵を轉じて、ブットレルと一緒に歩き出した。月は皎々と二人を照らして、道路づたひに動いて行く影法師の頭のまはりに、後光のやうなものが見えるくらゐであつた。ブットレルはその影を見ながら女に向かつて、わたしは相變はらずあなたが好きです、といふ意味のことを言はうとしたけれど、どんな風に切り出していいか分からなかつた。彼女は、相手が何を言ひ出すかと、待つてゐた。かうして二人は無言のまゝ、もうほとんど家の傍まで近づいた時、とつぜん家の角から騎馬の人が現はれた。それは護衛兵を連れた將校であつた。

『一たい今ごろ誰だらう?』とマリヤ・ドミトリエヴナは言つて、脇の方へ片寄つた。

月は馬上の人を後から照らしてゐたので、マリヤ・ドミトリエヴナは、ほとんどすぐ傍へ来るまで、何者か見分けが附かなかつた。それは、以前イヴン・マトゼーギツチと一緒に勤めてゐた、カーメネフといふ將校であつた。マリヤ・ドミトリエヴナもこの男を知つてゐた。

『ピョートル・ニコライツチ、あなたですか?』とマリヤ・ドミトリエヴナは聲を掛けた。

『えゝさうです。』とカーメネフは言った。『やあ、ブットレル、ご機嫌よう。まだ寝なかつたんで

すか。マリヤ・ドミトリエヴナと散歩ですわね? 氣をつけないと、イヴン・マトゼーギツチから

目玉を頂戴しますぜ。いつたいあの人はどこです?』

『ほら、聞こえるでせう。』太鼓や歌聲の響いて来る方を指さしながら、マリヤ・ドミトリエヴナは言つた。『騒いでるんですの。』

『それは何です、こゝの連中がやつてるんですか?』

『いや、ハサーフ・ユルトから新しい隊が來たので、つまりその宴會なんです。』

『あゝ、そりや結構だ。それぢや僕も間に合ふな。實はイヴン・マトゼーギツチのところへは、ほんのちよつとお寄りしただけなんですから。』

『何です、用事でもあるんですか?』とブットレルは尋ねた。

『なに、ちよつとした事で。』

『いいことですか、わるいことですか?』

『そりや人によつて違いますな。われ〜にとつてはいい事だけど、また中には、いやなことだと  
言ふ人もあるでせう。』とカーメネフは笑ひ出した。

このとき三人はイヴン・マトゼーギツチの家まで來てゐた。

『チヒリョフ。』とカーメネフは護衛のコサックを呼んだ。『こゝへ來い。』

ドン地方出身のコサックが一人、仲間から抜け出して、三人の傍へ近よつた。コサックは普通ドン地方の兵士が著てゐる制服を身に著け、長靴を穿き、マントを羽織つて、鞍の後に振り分けの袋を縛りつけてゐた。

『さあ、例のものを出さんか。』馬からおりながら、カーメネフはかう言つた。

コサックもやはり馬からおりて、何やら入つた袋を鞍囊の中から取り出した。カーメネフはコサックの手から袋を受け取つて、その中へ手を突込んだ。

『それぢや、あなたに珍らしいものをお目にかけてませうか？ びつくりしちやいけませんよ。』と彼はマリヤ・ドミートリエヅナの方へ振り向いた。

『何をびつくりする事があるでせう。』とマリヤ・ドミートリエヅナは言つた。

『さあ、これです。』とカーメネフは言つて、人間の首を取り出しながら、それを月光に翳した。

『見分けがつかますか？』

それは額が高く突き出した、頭を圓く剃られてゐる生首であつた。黒い顎鬚も口鬚も短く刈り込まれ、一方の目は完全に開かれ、今一方は半開になつてゐた。綺麗に剃つた頭は、めちやく／＼に斬られて血みどろになり、鼻の中には血が黒く塊まつてゐた。頸は血みどろの手拭ひで巻いてあつた。頭部に無数の傷を受けてゐるにも拘らず、紫色になつた唇には、子供らしい善良な表情が浮かんで

ゐた。

マリヤ・ドミートリエヅナは、ちよつとそれを眺めたのち、一口もものを言はないで、くるりと向きを變へると、足早に家の中へ入つてしまつた。

ブツレルはこの恐ろしい生首から、目を離すことが出来なかつた。それはついこの間まで、親しい會談にいく晩かを共に過ごした、かのハヂ・ムライトの首なのであつた。

『これはどうしたんです？ 誰が殺したんです？ どこで？』と彼は尋ねた。

『逃げ出さうとしたんで、引つつかまへたんですよ。』とカーメネフは言つた。そして首をコサックに渡すと、ブツレルと一緒に家に入つた。

『しかし、最期は立派なものでしたよ。』とカーメネフが言つた。

『一體どうしてそんな事になつたんです？』

『まあ、待つて下さい。イヴン・マトゼーギツチが來られたら、すつかり悉しく話しますから。實はそのためにわざ／＼派遣されたんですよ。要塞といふ要塞、村といふ村を持ち廻はつて、みんなに見せてるんです。』

イヴン・マトゼーギツチのところへは使ひが出された。やがて、へと／＼に酔つぱらつた彼は、同じやうに一杯機嫌の將校二人と一緒に、家へ歸つて來た。そして、いきなりカーメネフを抱き締

めにかかった。

『ところで、わたしは、』とカーメネフは言った。『ハチ・ムライトの首を持って来たんですよ。』  
『嘘を言へ！ 殺したのか？』

『さうです、逃げ出さうとしたんで。』

『だから、おれは手だと言つたんだよ。で、そいつはどこにあるんだ、首は？ 見せてくれ。』

そこでまたコサックが呼ばれた。彼は首の入つた袋を持つて来た。生首が取り出された。イヴン・マトゼーギツチは酔眼を見開いて、長い間それを見つめてゐた。

『それにしてもえらい奴だつた。』と彼は言つた。『さあ、おれが一つキスしてやらう。』

『さうです、ほんたうに利かぬ氣の人間でしたなあ。』と將校の一人が言つた。

みんなが首を見終つてから、またコサックの手に返した。コサックはなるべく音のしないやうに、床へ置かうとつとめながら、首を袋の中へ藏つた。

『どうだね、君、カーメネフ、こいつを見せる時に、何とか勿體らしい文句でも言ふのかい？』と一人の將校が訊ねた。

『いや、おれに接吻さしてくれ、あの男はおれに劍を贈り物にしてくれたんだ。』とイヴン・マトゼーギツチは叫んだ。

ブットレルは入り口の階段へ出た。マリヤ・ドミートリエヴナはその二段目に腰を掛けてゐた。

彼女はブットレルの方を振り向くと、すぐ腹立たしげに顔を背けた。

『どうなすつたんです、マリヤ・ドミートリエヴナ？』とブットレルは尋ねた。

『あなた方はみんな人殺しです。わたしはそんな人だいきらひ。人殺しよ、本當に。』と彼女は起ち上がりながら言つた。

『誰だつてあなるかも知れないですよ。』ブットレルは、どう言つていいか分からないので、こんなことを呟いた。『それが戦争なんですよ。』

『戦争？ 何が戦争なんです？ 人殺しです——それだけのこつてすよ。死んだ人の遺骸は、ちやんと土に納めなければならぬのに、みんな面白さうにげら／＼笑つてゐる。人殺しだ、ほんたうに。』と彼女は繰り返して階段をおりると、そのまゝ裏口から家へ入つてしまつた。

ブットレルは客間へ引き返すと、事の様子を悉しく話すやうにと、カーメネフに頼んだ。

そこでカーメネフは一切を物語つた。

それはかういふ具合であつた。

ハヂ・ムラートは、町の附近を馬で乗り歩くことを許されてゐたが、しかし必らずコサックの護衛付きであつた。ヌーフにゐるコサックは、みんな五十人くらゐしかなかつた上に、その中の十人は上官たちの従卒に採られてゐたので、もし命令通りハヂ・ムラートに十人づつ附けるとすれば、そのほかの者は一日毎に出かけねばならぬ事になるのであつた。さういふわけで、はじめの日だけは、十人のコサックを護衛につけたけれど、その後五人づつ減らして、ハヂ・ムラートには、自分の従者を全部つれて行かないやうに頼んだ。

けれど四月の二十五日に、ハヂ・ムラートは五人の従者を全部ひき連れて散歩に出た。ハヂ・ムラートが馬に乗らうとした時、司令官は五人の従者が五人とも、ハヂ・ムラートに附いて行く支度をしてゐるのを見て、それは禁止されてゐると注意したけれど、ハヂ・ムラートは聞こえないやうな振りをして、馬を進めた。で、司令官も強ひてとは言はなかつた。コサック達には一人の下士がついてゐた。ゲオルギイ十字章を貰つた勇士で、薄色の髪を伸ばして、ぐるりと周りを切つた、いかにも若々しい血色の、健康さうなナザーロフといふ若者であつた。彼は貧しい舊教派の家庭に長男として生まれ、早くから父に別れて、年取つた母のほか三人の妹と、二人の弟を養つてゐるのであつた。

『いいか、ナザーロフ、遠くまで出しちやいけないぞ。』と司令官は叫んだ。

『はい、隊長殿。』とナザーロフは答へた。そして肩の銃を仰へながら、鎧に兩足を掛けて、見事な體軀をしたおとなしい栗毛の去勢馬を、早足で進ませた。四人のコサックがその後から續いた。一人は痩せてひよろ長い、フェラポントフといふ仕様のない泥坊で、ガムザーロに火薬を賣りつけた男である。いま一人は、もうそろ／＼現役を終らうといふ中年の男で、岩乗な力自慢の百姓であつた。ミニーシキンといふのはいつもみんなの笑ひ草になつてゐる、意氣地なしの若造であつた。それからもう一人は、白つぼい髪をしたペトラコフといふ若者で、母親の一人子であるだけに、いつも人懐つこい、陽氣な質であつた。

朝のうちは霧が深かつたけれど、晝頃に天氣が収まつて、樹々の若芽や、處女のやうに若々しい草や、芽を出したばかりの麥や、道の左に見える急流の漣にも、太陽がきら／＼と輝いてゐた。ハヂ・ムラートは並み足で馬を進めた。コサックも従者も、遅れないやうにその後からついて行つた。かうして並み足のまゝ道路づたひに、要塞の外へ出た。籠を頭に載せた女や、荷馬車に乗つた兵士や、きいきい音のする牛車などに逢つた。二里ばかり離れた時、ハヂ・ムラートはカバルヂヤ産の白馬に鞭を當てた。彼が急に速度を出したので、従者たちも大きな速足でその後を追つた。コサック達も同じやうにしなければならなかつた。

『あいつの乗つてゐる馬は中々の逸物ぢやないか。』とフェラポントフが言つた。『もしこれがあの男



の歸順しない時分だつたら、あの馬に乗らしちや置かないんだがなあ。』

『そりやお前、チフリスで三百ルーブリ出して買った馬だもの。』

『なに、おれはこの馬で追ひ越して見せらあ。』とナザエロフが言った。

『そりや追ひ越せるだらうよ。』とフェラポントフが言った。

ハヂ・ムラートは次第に速度を早めた。

『おい、親友、そんなことをしちや困るよ。もつとゆつくり頼むよ！』ハヂ・ムラートに追ひつきながら、ナザエロフは叫んだ。

ハヂ・ムラートは後を振り向いたが、なんにも言はないで、相變はらず速度を弛めようともせず、さつさと馬を追ひつづけた。

『氣をつけなくちやいけないぜ、何かもくろみやがつたぞ、畜生。』とイグナートフは言った。

『どうだ、あの駈け出すことは。』

かうして一里ばかり山の方へ進んだ。

『だめだといふのに！』とまたナザエロフが叫んだ。

ハヂ・ムラートは返辭もしなければ、振り返らうともせず、かへつて速足から駈け足に移つた。

『だめだぞ、のがすものか！』ナザエロフは急にはつと思つて、かう呶鳴つた。

彼は遅しい赤毛の去勢馬に鞭をくれて、鐙の上に起ち上がり、前の方へ屈みながら、全速力でハヂ・ムラートを追ひはじめた。

空は拭つたやうに晴れ互り、空気は何とも言へないほど爽々しく、その上ナザエロフが遅しい善良な馬と一心同體になつて、坦々たる道路づたひにハヂ・ムラートの後を追つた時、ナザエロフの心には生の力が喜ばしく湧き返つてゐたので、彼は何か悲しいことや、恐ろしいことが起り得やうなどとは、夢にも考へなかつたのである。彼は一步毎にハヂ・ムラートに近づいて、次第に間隙が縮まつて行くのを喜んでゐた。ハヂ・ムラートは次第に近づくコサックの遅しい馬の蹙音によつて、もう間もなく追ひつかれるに相違ないと悟つたので、右手をピストルに掛け、後から来る馬の蹙音を聞きつけて、興奮して來た自分のカバルチャ馬の手綱を、左手で軽く引きはじめた。

『だめだといふのに！』ナザエロフは殆んどハヂ・ムラートに並行して、その馬の手綱を握らうと、手を差し延べながらかう叫んだ。けれど彼が手綱を掴むより先に、轟然たる銃聲が響き互つた。『何をしやがるんだ？』とナザエロフは叫んで、胸に手を當てた。

『みんなこいつをやつつける。』と彼はいつたが、そのまゝよろ／＼として、鞍の前橋に突つ伏してしまつた。

けれど山兵たちの方が、コサックよりも先に武器に手を掛けた。そしてコサック達をピストルで

撃ち倒したり、劍で斬りまくつたりした。ナザーロフは、戦友たちの周りを駆け歩く馬の首にぶら下がつてゐた。イグナートフは乗つてゐる馬が倒れたので、その拍子に足を敷かれた。二人の山兵は劍を引き抜いて、馬からおりようともせず、彼の頭や腕を滅多斬りにした。ペトラコフは戦友の方へ駆けつけようとしたが、その瞬間二發の弾丸が、一つは脊中、一つは横腹を撃ち抜いたので、彼はまるで袋のやうに馬から轉がり落ちた。

ミューシキンは馬首を轉じて、堡壘さして疾風の如く走つた。ハネーフィとハン・マゴーマはその後を追つたけれど、彼はもうすつと遠く離れてゐたので、山兵たちも追ひつくことが出来なかつた。

もうつかまへられないと諦めると、ハネーフィとハン・マゴーマは、味方のところへ引き返した。ガムザーロフは短劍でイグナートフの止めを刺すと、ナザーロフをも馬から引きずり落として、一太刀くはへた。ハン・マゴーマは死骸から彈藥入りの袋を外づした。ハネーフィはナザーロフの馬を捕へようとしたが、ハチ・ムラートは打つちやつて置けと叫んで、街道づたひに馬を進めた。部下の者どもは、後から走つて来るナザーロフの馬を追ひ拂ひながら、彼の後に續いた。彼等がヌーフからもう三里エルスナーばかり離れて、米畑の間を走つてゐる時、望樓から警報の銃聲が響き互つた。ペトラコフは腹を割かれたまゝ、仰向けに横たはつてゐた。その若々しい顔は空を仰いでゐた。

彼は魚のやうに喘ぎながら死んで行つた。

『あゝ、實にどうも、何といふことをしてくれたのだ！』ハチ・ムラートの逃亡を聞いた時、要塞司令官は両手で頭を掴みながら叫んだ。『おれの首は飛んでしまつた。逃がしてしまふなんて、畜生！』ミューシキンの報告を聞きながら、彼はかう叫んだ。

警報は到る處に傳へられた。ありたけのコサックが搜索に出されたばかりでなく、歸順してゐる山村アムルからも、出来る限りの民警隊が召集された。生きてゐても死んでゐても、とにかくハチ・ムラートを連れて來たものには、千ルーブリの懸賞が布告された。ハチ・ムラートが部下と共にコサックの手から逃れて、二時間ばかりたつたのち、二百人以上の騎馬の人々が、彼等の搜索逮捕のために、警察長官を先に立てて馬を走らせてゐた。

街道づたひに幾里エルスナーか走つた時、ハチ・ムラートは汗のために黝すんで、重々しく息をついてゐる白馬を控へて、歩みを停めた。街道の右手には、ベラールチック村のサイクリヤ小家や、塔が見えてゐた。左手は畑で、その涯に河が見えてゐた。山に向かふ道は、右手についてゐたにも拘らず、ハチ・ムラートは反對側の左手へ馬首を轉じた。それは、追手が必らず右へ向かふに相違ない、と見込んだか

らである。彼は道のない處を通つてアラザン河を渡り、誰ひとり思ひもよらない街道へ出たのち、その街道づたひに森まで辿り著き、そこから更に河を渡つて、山の中へ入り込むつもりなのであつた。彼はかう決心すると、方向を左へ取つた。けれど、河まで行き著くのは不可能だと知れた。彼等の越えなければならなかつた米畑が、ちやうど春のことだつたので、一面水に浸つて、馬の脚首から上まで沈むやうな、泥沼になつてゐたのである。ハチ・ムラートと従者達は、もう少し乾いた所があるだらうと思つて、右へも左へもさまざまに馬を進めて見た。けれど彼等の入り込んだ畑は、一めん出水に浸つたところなので、今でもひどく水氣を吸ひ込んでゐた。馬は瓶のコルクでも抜くやうな音をさせながら、ねば／＼した泥土から脚を引き出した。そして五六歩進むと、重々しく息をつきながら、立ち停まるのであつた。

かうして彼等は長い間もがき通した。でも、もう暗くなりかかつたのに、まだ河まで行き著くことが出来なかつた。左の方に、鳥のやうになつた新緑の藪があつた。ハチ・ムラートはこの藪の中へ這入つて、そこで疲れた馬を休ませるために、夜まで足を停めることにした。ハチ・ムラートと従者達は馬からおり、三本足を緩く縛つて勝手に草を喰べさせ、自分たちは用意のパンとチーズで腹を拵へた。はじめ新月があたりを照らしてゐたけれど、それも山の端に隠れてしまつたので、あやめも分かぬ夜となつた。ムラートには鶯が殊に多かつた。この藪の中にも二羽ばかりゐて、ハチ・ムラ

ートとその部下が入つて來ながら、がや／＼騒いでゐる間は、鶯も鳴りをしづめてゐたけれど、人間の方が静かになると、また互に呼び交はしながら、盛んに鳴きはじめた。ハチ・ムラートは夜の物音に耳を澄ましながら、われともなしにその聲を聞いてゐた。

鶯の囀りは、けさ水を汲みに出た時に聞いた、ガムザートの歌を思ひ出させた。彼は今いつ何時、ガムザートと同じ境遇に置かれるかも知れない。彼は必らずさうなるに違ひないやうな氣がして、急に嚴肅な心持ちになつた。彼は外套を披<sup>フカ</sup>げて、齋戒沐浴を行なつた。漸くそれが終はるか終はらないかに、藪の方へ近づく物音がした。それは泥をこね返す夥しい馬の登音であつた。目の早いハン・マゴーマは藪の一端へ駆け出して、騎馬や徒歩の人々の黒い影を闇の中に見透かした。ハネーフィもそれと同じくらゐな群衆を、反對の側に認めた。それは民警達を引き連れた、軍騎兵長官カールガーノフであつた。

「仕方がない、われ／＼もガムザートのやうに戦ふんだ。」とハチ・ムラートは考へた。

警報が傳へられたのち、カールガーノフは百人ばかりの民警とコサックを引き連れて、ハチ・ムラートの追跡に赴いたが、どこにも當のハチ・ムラートはおろか、その足跡すら発見することが出来なかつた。カールガーノフはもう絶望して、引き返さうとしてゐたが、夕方ふと一人の老人に出あつた。カールガーノフは老人に向かつて、騎馬の人達に出あはなかつたかと尋ねた。老人は見たと答へ

た。彼は六人の騎者が稻田の中を跳きまはつたのち、藪の中へ入るのを見たと言明した。彼はそこで薪を集めてゐたのである。カルガーノフは老人を引き連れて、また後へ取つて返した。そして、三本足を縛られた幾頭かの馬をみると、ハチ・ムラートがそこにゐるに相違ないと確かめたのち、夜になつてから藪を取巻き、夜が明けるのを待つて、ハチ・ムラートを生け捕りにするなり、首を擧げるなりしようと決心した。

取巻かれたと悟るが早い、ハチ・ムラートは藪の真ん中に古い溝を見つけ出し、その中に立て籠もつて、弾丸と力のつゞく限り防戦しようと思つた。彼はそれを部下に傳へて、溝の縁に土壘を造るやうに命じた。従者達はさつそく木の枝を切り、短刀で土を掘つて、土壘を造りにかつた。ハチ・ムラートも彼等と一緒に働いた。

漸く東が白みかかつた時、民警隊の百人長が藪に近々と馬を寄せて、聲高にから呼びかけた。

『やい、ハチ・ムラート、いい加減に降参しろ！ こつちは大勢だが、そつちは小人數ぢやないか。』

それに對する答へとして、溝の中から丸い煙の固りが現はれ、銃ががちりと鳴つた。そして弾丸は民警の馬に當つた。馬は一つ跳ね上がったと思ふと、そのまま倒れて行つた。それに續いて、藪の周りにゐた民警たちの小銃が、ばち／＼と鳴り出した。弾丸は口笛のやうな音を立てたり、唸

つたりしながら、木の葉や小枝を傷つけたり、土壘に當つたりしたが、その後には隠れてゐる人間には命中しなかつた。たゞ主人の傍を離れて飛び出した、ガムザイロの馬だけは手傷を負つた。頭を撃ち抜かれたのである。けれども馬は倒れないで、脚を縛つてあつた綱を引きちぎり、藪をめぐり押し破りながら、ほかの馬の方へ飛んで行つた。そして若草を血に染めながら、仲間の方へ體を指り寄せた。ハチ・ムラートとその部下の者は、民警隊の誰かが前へ出た時にしか發砲しなかつた。そして、殆んど狙ひを外づさなかつた。三人の民警が負傷した。で、ほかの者は思ひ切つてハチ・ムラートの方へ突進しない計りか、反つて次第に後じさりをして、たゞ遠くの方から出鱈目に撃つ計りであつた。

こんな風にして、一時間以上つゞいた。太陽は立木の半分くらゐの高さまで昇つた。ハチ・ムラートはもう馬に乗つて、河の方へ血路を開かうかと考へてゐたが、その時さらに多人數の新手が押し寄せる、関の聲が聞こえた。それはメフトゥーリンのハチ・アガが、部下を率ゐてやつて來たのである。それは總勢二百人ばかりであつた。ハチ・アガはかつてハチ・ムラートの親友で、一緒に山に棲んでゐたが、その後露西亞軍に移つたのである。彼等の中には、ハチ・ムラートの仇敵の息子である、アフメート・ハンも混じつてゐた。ハチ・アガもカルガーノフと同じやうに、まづハチ・ムラートにむかつて、降参しろと叫んだが、ハチ・ムラートは先ほどと同じやうに、射撃をも

つて答へた。

『拔劍！』とハチ・アガは叫んで、自分も劍を引き抜いた。と、藪の中へ突進する數百人の人聲が、一時にどつと起こつた。

民警たちは藪の中へ駈け込んだが、土壘の蔭からつゞいて幾發かの銃聲が轟いた。三人の者が撃ち倒された。で、寄せ手は藪の縁に立ち停まつて、同じやうに射撃を始めた。彼等は射撃を続けながら、それと同時に、灌木から灌木の蔭へ飛び移つて、ぢり／＼と土壘の方へ寄せて行つた。うまく駈け抜ける者もあれば、ハチ・ムラートとその部下の弾丸に倒れるものもあつた。ハチ・ムラートには一發も外れ弾がなかつた。同様にガムザーロも、ほとんど無駄な弾を撃たなかつた。そして弾が敵に命中する度に、いつも嬉しさうな叫び聲を立てるのであつた。ハン・マゴーマは溝の縁に腰掛けて、『リヤ、イリヤフ、イリヤフ、イリ、アラ』と歌ひながら、悠々と急がずに射撃したが、餘りうまく當たらなかつた。エルダールは短劍をもつて、敵陣へ飛び込みたくて堪らないので、全身ぶる／＼と武者ぶるひしながら、ろくに見當もつけず、のべつハチ・ムラートの方を振り返つては、頻繁に發射してゐた。そして、土壘の蔭から身を乗り出すのであつた。毛むくじやらのハネーフィは兩袖をたくし上げて、こゝでも従僕の役目を勤めてゐた。彼はハチ・ムラートとハン・マゴーマが渡す鐵砲を受け取つて、油を泌ませてある紙に包んだ弾丸を、鐵の素條で一生命に押し込んだ

り、乾いた火薬を藥池に入れたりしてゐた。ハン・マゴーマはほかの者のやうに、壕の中にちつとしてゐないで、しじう馬の方へ飛んで行つては、比較的安全な場所へ追ひやつてゐた。そして、絶えず甲高い叫びを立てながら、銃架なしに素手で射撃してゐた。彼は眞つ先に負傷した。弾丸が頭に中たつたのである。彼は口から血を吐いて、口ぎたなく罵りながら、べつたり尻もちをついた。續いてハチ・ムラートが手傷を負うた。弾丸が肩を撃ち抜いたのである。ハチ・ムラートは下著の中から綿をちぎり取つて、それを傷口につめると、また射撃を續けた。

『劍を抜いて突撃しませう。』とエルダールが言つた。もうこれで三度目であつた。

彼は敵陣に斬り込む覺悟で、土壘の蔭から上半身をさし覗けた。けれどその瞬間、弾丸が命中して、彼はよろ／＼したかと思ふと、そのまゝハチ・ムラートの足の上へ、仰向けに倒れた。ハチ・ムラートはちらと彼を眺めた。羊のやうな美しい目がじつと眞面目にハチ・ムラートを見つめてゐた。子供のやうに突き出た上唇が、開きもせずにはびく／＼引つ吊つてゐた。ハチ・ムラートは、その體の下から足を引き抜いて、じつと狙ひつゞけてゐた。ハネーフィはエルダールの死骸の上に屈み込んで、まだ使はない弾を、チェルケス外套から抜き取りはじめた。ハン・マゴーマはその間しじう歌ひつゞけながら、ゆつくり／＼弾丸を籠めて狙つてゐた。敵は茂みから茂みへ渡りながら、関の聲と共に、次第に近く攻め寄せて來た。また一發の弾丸が、ハチ・ムラートの左の横腹に命中

した。彼は壕の中に横たはつて、また下<sup>ベシユメイト</sup> 著から一塊りの綿を引きちぎり、傷口に填めた。横腹の傷は致命的なものであつた。彼も自分の死を直覺した。さまざまの追憶や幻影が、なみく／＼ならぬ速さをもつて、かはる／＼彼の想像に浮かんで來た。彼は自分の目の前に強力<sup>ガウリヤ</sup>のアブヌツァール・ハンを見た。ハンは斬り落とされてぶら下がつてゐる片頬を手で抑へながら、一方の手に短劍を持つて敵と闘つてゐる。かと思ふと、狡猾らしい白い顔をした、弱々しい血の氣のないブロンツォーフ老人を見、その柔らかい聲を聞いた。それからまた息子のユスーフと、妻のソフィアアートを見、赤い鬚を生やして目を細めた、敵のシャミールの顔を見た。

かうした追憶が、哀憐も憎惡も、希望も、何の感情をも呼び醒ますことなく、彼の想像を流れすぎた。これらすべてものは、彼の内部に始まつてゐるものと比較すると、實につまらない取るに足らぬもののやうに思はれた。とはいへ、彼の力強い肉體は、一旦はじめたことを續けた。彼は最後の力を振るつて、土壘の蔭から身を起こし、自分の方へ駈けよる男に向かつて、ピストルを放した。彈丸<sup>たま</sup>は命中した。男は倒れた。やがて彼はすっかり壕の外へ出て、重々しく跛を引きながら、短劍を手に持つて、眞つすぐに敵の方へ向かつて行つた。いくつのか銃聲が響いたと思ふと、彼はよろ／＼となつて倒れた。四五人の民警が関の聲を揚げながら、倒れた體に飛びかかつた。けれども彼等の目に死骸と見えたものが、急にむく／＼と動き出した。はじめ帽子のない血みどろの坊主頭

が持ち上がった。續いて胸體が起きた、最後に彼は立木につかまりながら、ぬつくとはかり起ち上がった。その形相がいかにもの凄かつたので、駈け寄らうとした人々は、思はず足を停めた。けれど不意に、彼の體がぐらりとしたかと思ふと、ふら／＼と木から離れて、まるで刈り取られた薊のやうに、顔を俯向けながら棒倒しに倒れた。そして、もうそのまゝ動かなかつた。

彼は動かなかつたけれど、しかしまだ感じはあつた。まづ第一番に駈け寄つたハチ・アガが、大きな短刀で彼の頭に斬りつけた。彼はまるで金槌で頭を殴られたやうな氣がして、誰が何のためにこんなことをするのか、合點がゆかなかつた。これが彼の體に關聯した最後の意識であつた。それ以上はもうなんにも感じなかつた。そして敵は、もう彼と何の共通點も持たないものを、踏みにつたり、斬りさいなんだりした。ハチ・アガは死骸の脊中に片足をかけて、二打ちに首を打ち落とし、靴を血で汚さないやうに、そつと足で轉がした。首の動脈から噴き出す眞つ赤な血と、頭から流れる黒い血が、忽ちあたりの草を染めてしまつた。

カルガーノフも、ハチ・アガも、アフメイト・ハンも、すべての民警たちも、仕とめた獸に集まる獵師のやうに、ハチ・ムラートとその部下の死骸を取圍んだ（ハネーフィと、ハン・マゴーマと、ガムザードは縛り上げられた）。そして硝煙に裏まれた藪の中に立つて、たのしげに語り合ひながら、自分たちの勝利を祝した。

トルストイ ハチ・ムラート 養徳叢書 1026  
米川正夫

譯者略歴

明治二十四年岡山に生る。東京外語露語部を卒業、大蔵省・ロシア領事館などに勤む。ドストエフスキ全集、戦争と平和などの譯書多し。

昭和23年9月10日印刷  
昭和23年9月15日發行

譯者・米川正夫

發行者・東井三代次  
奈良縣丹波市町川原城  
會員番號A125015

印刷製本者・若林吉郎兵衛  
京都市右京區太秦上刑部町  
大日本印刷株式會社

發行所・株式會社 養徳社  
本社 奈良縣丹波市町川原城  
振替口座 京都 25648  
京都市中京區蛸薬師通室町西入



ハチ・ムラート  
〔定價 130 圓〕

射撃の續いてゐる間、しづまりかへつてゐた鶯は、再び勢ひよく囀りを立てはじめた。はじめ近くで一羽が鳴き出すと、やがて遠くかなたの方で、幾羽か聲を揃へて歌ひ出した。

かの鋤き返された畑中で、無慙にひしがれてゐた薊が、わたしに聯想を喚び起こしたのは、つまりこの死に他ならぬのである。

養徳叢書 外國篇

既刊

宮本正二郎 胡適自傳 吉川幸次郎 我々が毒 小宮秀一 人間隨想 關根秀二 愛の情念に關する説 谷友ナカ 感情旅行 津田嘉郎 本當の話 松村達一 白鳥省三 感覺より思索へ 山田潤二 ホイットマン詩集 吳田茂ノ ドミニック 小川成豊 雨窓欵枕集 市原豊太 矢名環 無名氏 若林光夫

石中イザハ 回想録・觀想 川部隆次 わが心の記 田部正己 旅の宿の夜話 服部正己 美しき魂の告白 高安國世 バヴァリアの森から 高安國世 人間の美的教育について 吉田次郎 コサック 吉田次郎 愛の形而上學 米田正夫 ハヂ・ムラート 片山泰雄 ショーベンハウエル 米田正夫 愛の形而上學 米田正夫 愛の形而上學 米田正夫 愛の形而上學

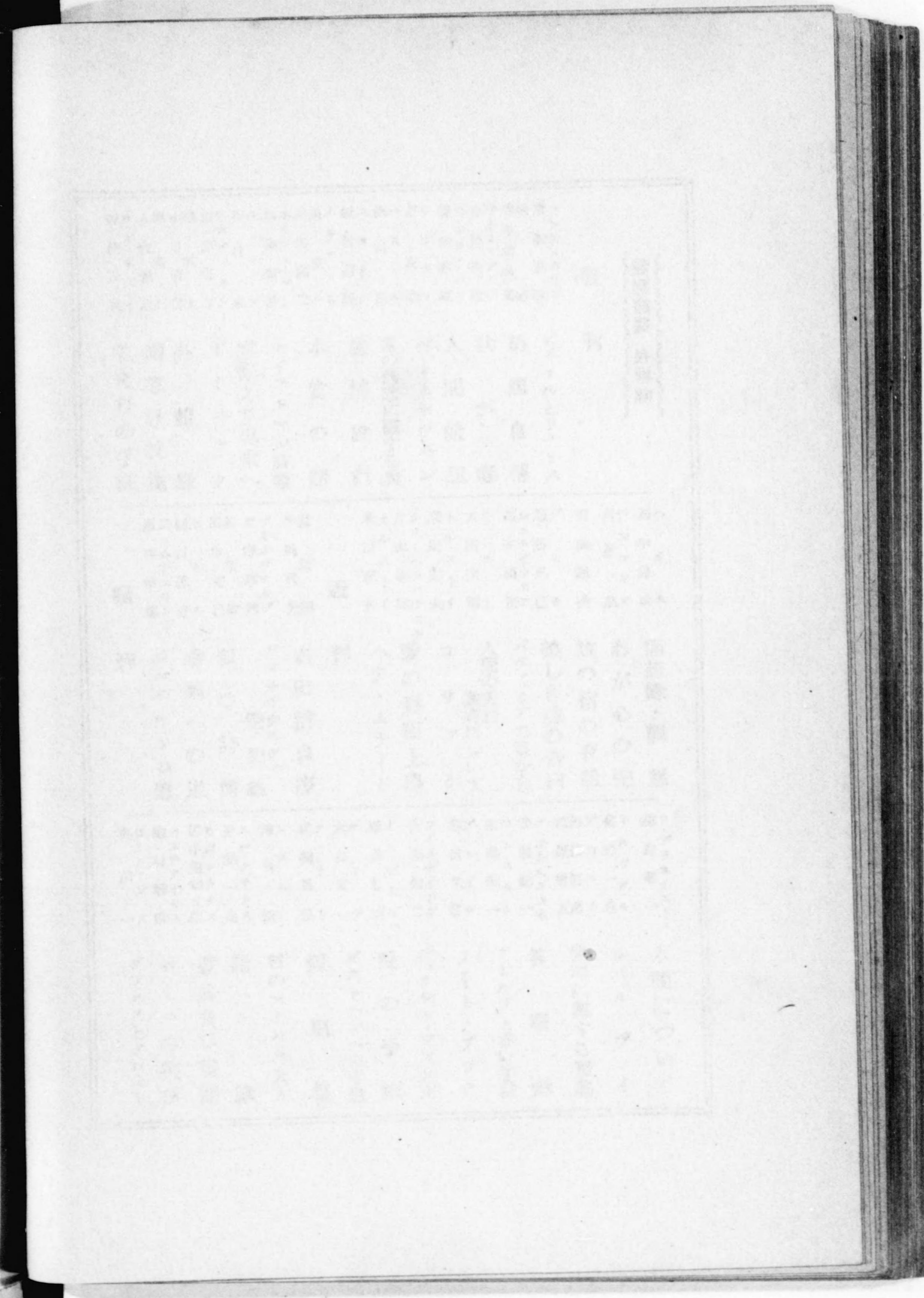
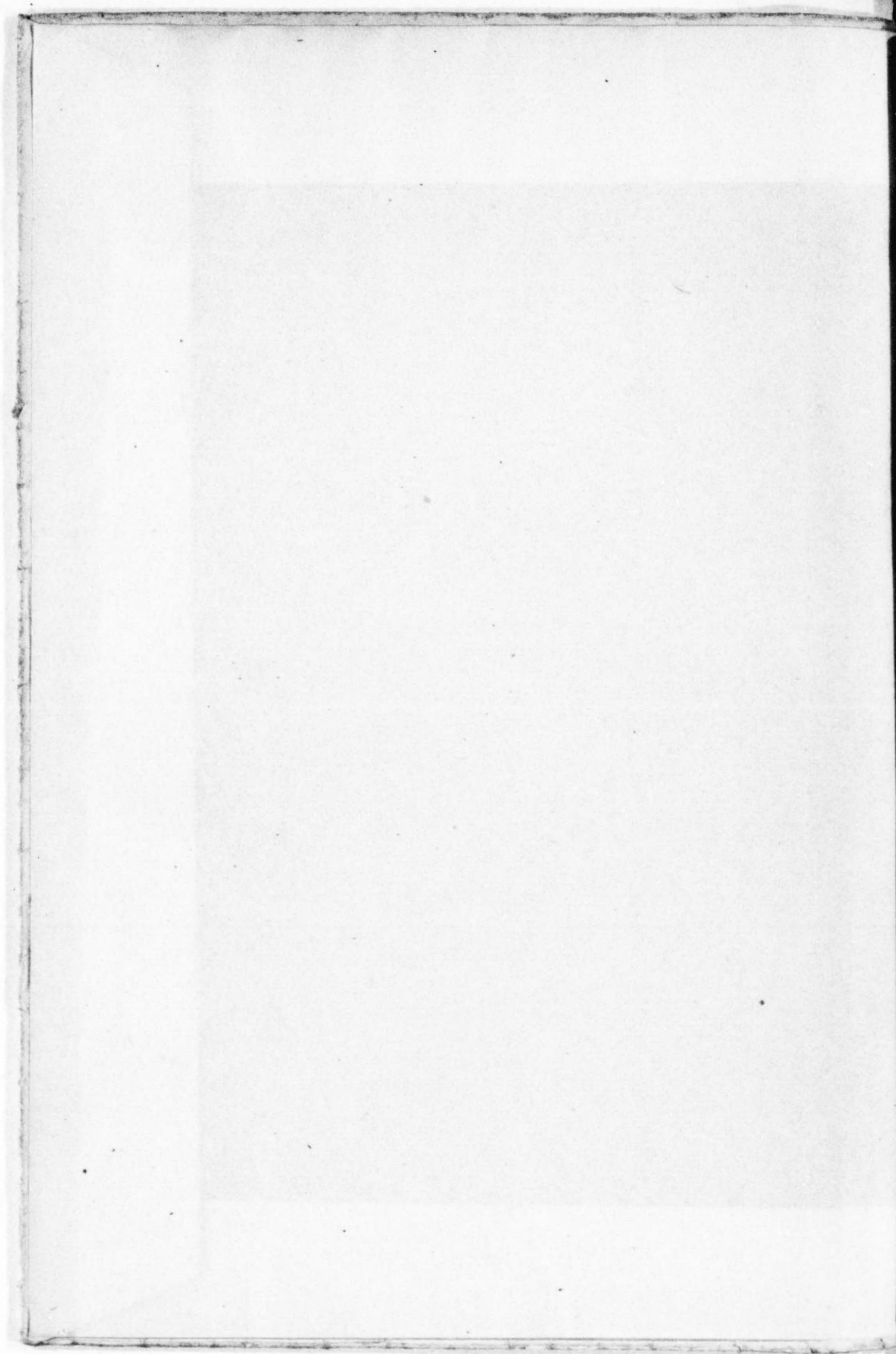
平頭剛 古史辨自序 大塚幸男 ヴォオヴナルグ 大塚幸男 狐の詩情 田部正己 幸福への道 樋口勝彦 ジエルマンの戀 樋口勝彦 樋口勝彦 樋口勝彦 樋口勝彦 樋口勝彦 樋口勝彦 樋口勝彦 樋口勝彦 樋口勝彦 樋口勝彦

ラブリエール 人間について シルヴァイ 倫理に關する書簡 省察録 アドルフ・赤い手帖 ノート・ブツク ジョナサン・ワイルド 愛の手紙 グストヘンへの手紙 短篇集 村のマクベス夫人 語 箴言及び書簡 ローマの笑ひ ダフニスとクロエー

ラブリエール 人間について シルヴァイ 倫理に關する書簡 省察録 アドルフ・赤い手帖 ノート・ブツク ジョナサン・ワイルド 愛の手紙 グストヘンへの手紙 短篇集 村のマクベス夫人 語 箴言及び書簡 ローマの笑ひ ダフニスとクロエー

ラブリエール 人間について シルヴァイ 倫理に關する書簡 省察録 アドルフ・赤い手帖 ノート・ブツク ジョナサン・ワイルド 愛の手紙 グストヘンへの手紙 短篇集 村のマクベス夫人 語 箴言及び書簡 ローマの笑ひ ダフニスとクロエー





終

